
エセプリカ

光太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エセプリカ

【Nコード】

N1482C

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

不思議な少女の、とても短い物語。

ダーク系ショートショ

ト 【2007年執筆】

の目の エセプリカ

たの 瞳は 金色で

きらきら 光ってる

金色

あな

きらきら

の目の エセプリカ

わいい エセプリカ

なたを 愛すでしょう

金色

かわいい か

だれもが あ

の目の エセプリカ

きれいで いたいから

べても いいですか

金色

ずっと

あなたを 食

「懐かしい歌を歌っているのね」
声をかけられ、少女は振り返った。

長いブロンドに、茶色の瞳。エプロンドレスを着た、人形のような少女。

声をかけた主は、少女の容貌に目を見張った。

「驚いた……。天使かと思ったわ、お嬢ちゃん。でなければ……。そう、まるで歌のなかから、エセプリカが出てきたのかと」

「ここ、取り壊しちゃうの？」

少女は、まったく別のことを口にした。

女は寂しそうに微笑んで、首からぶら下げた十字架にそっと触れる。

「そうね。お嬢ちゃんが天使だったとしても……。もう、遅かったわ。この教会は、なくなってしまうの」

「かみさまが住んでいるのに？」

「もうどこかへ行ってしまったのよ」

少女は、女の胸元の十字架を、それから正面に堂々と掲げられた大きな十字架を、見た。

ここに在る事実是不変ならないけれども、もうここには、いない。所詮はひとの心のなかのものだから。

「へんなの」

責められるようにまっすぐ見られ、女は、少女の大きな瞳から、少しいだけ視線をはずした。

「仕方ないわ。一年前に大きな結婚式があっただけ……。その二人が、不幸な結果になってしまったの。それから、だれもここへは訪れない」

「へんなの」

もう一度繰り返し、それから少女は、かすかに唇で笑顔の形を作った。

「でもそれは、あたしには関係ない」

少女は跳ぶように立ち上がり、ふわりとスカートを翻した。

上目遣いに、女の顔をのぞき込む。

「ねえ、お姉さん。あたし、お腹が空いてるの。ごはんを食べさせ

て」

女はゆっくりと目を瞬かせ、それから思わず吹き出した。

「とんでもない天使ね！　いいわ、何か作ってあげる。いらっしい」

女はそつと右手をさしのべた。少女はその手をつかみ、満面の笑みを浮かべる。

「ありがとう、お姉さん」

教会の裏側には、質素な造りの民家が建っていた。民家というより、小屋に近い。一日、二日宿をとるのに使われる類の、最低限の設備しかないようだった。

「お姉さんは、シスターさんなの？」

女はエプロンをつけながら、小さく笑った。

「違うわ」

「ここに住んでいるの？」

「いまはね」

言葉少なに返し、キッチンに立つ。少女は許可も得ず、木の椅子に腰かけ、テーブルに頬杖をついた。足をぶらぶらさせながら、家のなかを見渡す。

風の冷たくなる季節だというのに、窓という窓がすべて開け放たれている。床には絨毯、その上にテーブルが一つと、椅子が二つ。辛うじてタンスはあるが、暮らしているにしては、生活感がない。第一、どこで寝ているというのだろうか。

ぺたりと頬をテーブルにつけ、少女は料理をする女を見た。

黒いワンピースの、痩せた女。

「ねえ、エセプリカって、知ってる？」

こちらを振り返らずに、女は答えた。

「知ってるわ。さっきあなたが歌ってた、金色の目のエセプリカ」
肉と野菜を炒めたものを皿に盛り、テーブルへと運ぶ。

ことり、と皿を置き、スプーンを少女に渡した。

「小さいころ私も歌ったし、おとぎ話も聞かされたわ。エセプリカの肉を食べると、いつまでも若く綺麗でいられる、ってお話」

「おとぎ話なの？」

「おとぎ話よ。昔は何も思わなかったけど、いま思うと残酷な話よね。食べる、だなんて」

「これも、お肉」

少女は、スプーンでこんがりと焼けた肉をすくった。いただきます、とつぶやき、口へ運ぶ。

「ざんこく？」

困ったように、女は笑っただけだった。

「お姉さんは、食べないの？」

皿は一つだけだ。女は少女の向かい側に腰かけて、こちらを見ている。

「お腹空いてないの？」

「食べたくないの」

やわらかく、しかし強い意志で答える。

少女は、小首をかしげた。

「死んじゃうよ？」

ひどく痩せた身体。

目の下には、はつきりと隈が刻まれている。

「いいのよ」

「帰ってこないから？」

女は、かすかに、目を見開いた。

無邪気に問いかけてくる少女の目を見た。
聞き間違いだろうか。

「……なに？」

「あいするひとが、帰ってこないから？」

少女はスプーンを置き、跳ぶように立ち上がると、絨毯をめくった。その下にあった、地下へ続く扉を見て、わざとらしく鼻をつまむ。

「ねえ、これ、もう腐ってるよ」

女は動けない。

「一年前に結婚した年下のカレは、すぐにもっと若い女の人と、出て行っちゃったんだよね？　かわいそう。でも殺しちゃうことないのに。神父さんも、シスターも、若い女の人も——」

少女は、女の隣へ回り込み、その左手にそっと触れた。愛おしうに、もうぶかぶかになってしまった薬指のリングに、口づけする。

「——お姉さんの、あいするひとも」

女は少女の手を振り払い、少女は床へたたきつけられた。

震えながら、少女を見下ろす。茶色の瞳を細め、少女は笑った。

「どうして驚いているの？　お姉さんが呼んだから、来たのに」
女の表情から、徐々に、驚愕の色がなくなっていく。やがてその唇が、笑みの形に、ぐにやりと曲がった。

「お嬢ちゃん、あなたの、名前は？」

「エセプリカ」

ああ、と歓喜の声を上げ、彼女は少女を抱き上げた。我が子を抱くように、ほおずりをして、愛しさに瞳を伏せる。

「待ってたわ、エセプリカ！　あなたがいれば、彼が帰ってくる！　私は誰よりも綺麗になって、彼の愛を一身に受けることができるんだわ！」

女は少女を抱いたままキッチンへ行き、包丁を手にとった。

「さあ、あなたを食べさせて——！」

少女は笑った。

瞳の茶の色は、ゆっくりと金に染まった。

金色の目。

「いったでしょう、ごはんを食べさせてって」
鮮血が散った。

金色

の目の エセプリカ

ずっと

きれいで いたいから

あなたを 食

べても いいですか

少女は歌いながら、木の椅子に腰をかけ、足をぶらぶらと揺らす。
横たわる食料を見下ろした。

「ありがとう、お姉さん」

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482c/>

エセプリカ

2010年10月28日03時15分発行